

Jリーグ百年構想の実現～日本で地域密着は通用するのか～

The realization of J.league One Hundred Year Vision

1K06B020

指導教員 主査 宮内孝知先生

石川琢人

副査 作野誠一先生

1. 研究動機

Jリーグが打ち出したクラブ運営の方向性を表す「地域密着」という言葉は、他のプロスポーツにも欠かせないものとなっている。しかし私は、この「地域密着」を掲げたJリーグが、これから先、その歴史を積み重ねることができるのか疑問に感じている。チームが地域に密着した活動さえしていれば、人々は毎試合スタジアムに足を運んでくれるようになるとは思えない。欧州でサッカーが多くの人々から熱狂的に愛されている背景には、歴史や宗教あるいは民族関係から生じたライバル心やプライドとサッカーとの結びつきが考えられる。そこで、日本という土壌で「地域密着」は通用するのかを検証していく。

2. 各章の要約

第1章では、欧州の人々とサッカーの関係について、人々の敵対意識が最もはっきりと表れるダービーを参考に、なぜ人々がサッカーに熱狂적인になるのかについて考察した。イタリアやスペインには、もともといくつかの都市国家が集まり国が成り立ったという背景があり、それが国民の地域意識をより強いものにしているということ、スコットランドのオールドファームと呼ばれるダービーには、カトリック対プロテスタントという宗教的な対立が背景に見られること、イングランドのタイン・ウィアダービーでは、炭鉱と造船を巡る町同士の対立が背景に見られることを明らかにした。欧州ではサッカーの試合が、自分たちの優越性を証明するため

の代理戦争としての意味合いが強い。

第2章では、スポーツビジネスの先進国である米国にスポットを当て、米国の4大プロスポーツリーグの中でもNFL、MLBの発生と変遷について調べ、その人気の背景を検証した。チームの本拠地移転が頻繁に行われていることを踏まえると、米国のプロスポーツには、地域的な対立や民族や階級の対立を背負った代理戦争としての意味合いはないといえる。米国のプロスポーツは、徹底した戦力均衡政策など、試合が白熱するような仕組みづくりが特徴的で、国民にとってはエンターテインメントとしての意味合いが強いことを明らかにした。

第3章では、日本のスポーツに焦点を当て、プロ野球と浦和レッズの人気背景について論じた。プロ野球はその発展の過程で、地域との結びつきよりも企業との結びつきによって国民の人気を得た。近年は人気低迷を背景に、地域密着モデルへとシフトしたが、再び観客動員を増やしつつある。浦和レッズに関しては、サポーターが熱狂的にクラブを応援する背景を検証した。「サッカーの街・浦和」というプライドを持った地域の人々が、我々こそ真のサッカー王国であるということを証明すべく毎週スタジアムへと足を運び、クラブを熱狂的に応援するのだということを明らかにした。

終章では、第1章から第3章までの結果を踏まえ、地域密着が日本で通用するのかどうかを考察した。「Jリーグ百年構想」の実現には、単純に欧州や米国の優れたところを取り入れれば良いというわけではない。欧州や米国は、それ

それぞれの地域に見合った形でスポーツを発展させてきた。従ってＪリーグも、日本という土壌をよく分析した上で発展させていくことが求められる。その手段として、まずＪリーグは、地域に根差した社会貢献活動を通じて、「社会の公共財」としての機能を強めていくと同時に、サッカーを通じて自分たちの誇りやプライドを生成し、その優越性を証明しなければならないという感情を地域の住民に植えつけることが必要である。